「アガペ」（題字・伊藤博胤）

日本社会事業大学
Japan College of Social Work

アガペ

日本社会事業大学同窓会北海道支部【2026年11月15日発行　第46号】
（連絡先＝札幌市厚別区厚別南5丁目1−10　社会福祉法人栄和会　011--896-5010）

2027年「北海道社会福祉セミナー」開催に向けての飛躍を

道同窓会会長（学部第23期）　瀬戸　雅嗣

同窓会北海道支部（通称「道同窓会」）会長の瀬戸雅嗣（学部23期）です。

私をご存じの方もいらっしゃるとは思いますし、就任時には、この「アガペ」でご挨拶させていただいたものの、この間、道同窓会総会を正式には開いていないため、ホントに私で良いのかという思いも正直あります。

道同窓会の最近の活動としては、この「アガペ」の不定期ながらの発行と、年に1回開かれる社大同窓会の全国幹事会及び同日に行われる「OB,OGと現役学生の交流事業（道同窓会の発案で始まった就活フェア）」への参加（しかし、今年は残念ながら台風接近による天候悪化のため中止）くらいでした。

また、昨年9月には大橋謙策先生からの提案で、道内の社会福祉関係者の協力も得て、社会福祉セミナーも開催しました。

実は、これくらいしかありませんでした、ね。

この状況を見かねた村上前会長をはじめ何人かの先輩から「一度打ち合わせをした方が良いのではないか」とお声がかかり、10月3日に札幌で、関係者による「懇談会」という名の打ち合わせを行いました。

そこでは、道同窓会の必要性を確認しつつ、今の道同窓会の状況というよりは、北海道の社会福祉系大学卒業生等の状況からみて、社大同窓会が独自で動くよりは、北海道で活躍する社会福祉系大学や専門学校の卒業生等と連携することの方が必要なのではないか、ということなりました。

この社会福祉系大学卒業生等の連携に関しては、「ヨコイト」という緩やかな全道の連携組織を作りました。しかし、コロナ禍などの影響もあり、現状ではこの会も有名無実化しており、その復活も必要となっています。

そこで、今後の予定として、①来年27年1月頃にまず、北海道の社会福祉系大学・専門学校等の卒業生等との打ち合わせを行い、②5月頃には、道同窓会の総会の開催とともに、「北

海道社会福祉セミナー」の開催、を目指すこととしました。
　と言っても、既に11月になっており、1月の打ち合わせ開催も急がなければなりません。
　つきましては、道同窓会の会員のみなさまと「アガペ」をご覧になっている関係者のみなさまのご協力を心よりお願いするものです。
　北海道の、かつ日本の社会福祉を担っているのはみなさんですから、道同窓会の活動へのご指導とご協力を、重ねてお願いするものです。

社会福祉随想リレー

長生きしたく無くなる…日本の高齢福祉～母の介護から見たもの～

道同窓会副会長（研究科第40期）　白井紀代美

　確か2000年、鳴物入りで40歳以上の全ての国民に保険料の支払いを義務付ける「介護保険制度」が始まった。介護は妻や嫁さんや娘の仕事ではなく、「社会が担う」と銘打って始まったことを記憶している。
　あれから25年が過ぎ、今や日本の介護保険は失敗だと釘を刺す学者も少なくない。

　私の母は10年ほど前から車椅子生活をしている。昭和一桁生まれの父は、母の介護は厳しいとして、母は老健施設でリハビリを始めた。老健施設はご存知の通り、入院などのあと、3ヶ月を限度に在宅生活に向けてリハビリをし、自宅に帰る、いわゆるトレーニング施設。
　しかしながら、このリハビリをしたとしても、自力歩行は3m程度。自宅に戻り歩行器使用で歩くことも困難、ご飯支度などできるわけもなく～。
　つまり、父一人での介護は到底無理。

　ということで、3ヶ月ごとに一旦退所。そして、次の1ヶ月は数日在宅してショートステイ。こんな裏ワザ?的形態を何年続けただろう。もちろんその間に、特養の申請は年2回欠かさず申請し、5年を過ぎた頃だろうか…ある日入所決定通知が来た。
　コロナ禍で入所したら面会ができなくなるため、周囲が入所をためらった時期に。ここで断ると、5年間申請を続けてきた実績が無効になり、始めからやり直しになりますよ…という「脅しか?」と思われてもおかしくない魔法のメッセージを受けて、母は特養に入所することになった。
　都会の特養の空き待ちは容易ではなかった。遠くの特養に面会に行く体力が無い父は、歩いて毎日でも行かれる近所の廃校になった小学校を改築した特養を選んだ。けれども、母が特養入所してまもなく、父は亡くなってしまった。なんとも虚しい出来事だった。

　その後、コロナの厳重措置も解け、面会可能にはなったものの、これまでの慣れた住まいであった老健から特養に変わった母は、不安定になる。が、間もなく慣れて穏やかに生活できるようになったのも束の間。運営施設の法人が、人材確保が厳しくなり運営が図れないという理由で、次回の特養選考には申請しないと言う。

他法人の運営になれば、おのずとスタッフ全員入れ替えになる。慣れていたヘルパーも看護師も変わり、一から関係作り。家族も、信頼関係の構築からやり直し。母を預けている以上、面倒な家族と言われたくないので努力した（つもり）。

母は、歳なりの認知症はあるものの、温泉やカラオケが大好きで、私が定年退職してからは、カフェでコーヒーを飲んだり、車椅子利用の温泉旅行など、憩いのひと時を過ごすこともできた。老健施設のように3ヶ月に一度の「裏技?」を使うこともなく、「終の住処」として落ち着いた生活になって行った。

そんなある日、肺炎を患い救急搬送された。以前から延命措置は行わないこととしていたが、持ち直し施設に戻る。しかし、その1ヶ月後また呼吸苦になり、母の希望で入院することになる。入院時の主治医の診断は、今回は肺炎にはならず早めの措置ができたので、1週間程度の入院ということ。

すぐに施設担当者に「1週間後の退院」の連絡した。というのも、入れ歯が合わなくなってから、母の食事は柔らかい食事形態になっている。この食事形態は発注してから1週間後でないと対応不可だそうで、前回は退院が決まってから土日を挟んだため、10日間病院に治療がないのに留まることになってしまった。

家族が施設に食事を持ち込むこともNG。施設の普通食を家族がミキサーにかけて食べさせることもダメと言われ、治療無しの延長病院生活が10日間続いた。

高齢者は入院生活が長引くとますます衰えるのは言うまでもなく、前回のようにならないよう、「1週間で退院」という診断を施設にはすぐ連絡した。

予定通り退院した母の部屋には、母の荷物の一切合切がなくなっていた。タンスの上に飾ってあった孫たちの写真や大好きな石原裕次郎と一緒に写した笑顔の写真もない。介護スタッフに聞いても、「理由はわからない」という。一体どうなっているのか？　スタッフに尋ねてもわからない。呑気な私は、入院中ショートステイで、どなたかが使ったので部屋を片付けたのかと思っていた。それにしても、家族にも断りなく?とは思っていたが…。

退院翌日、相談員に呼ばれた。

施設長も同席しての面接。内容は以下の通り。

頻回に入院することから医療院に移って欲しい。

私から。「頻回にと言っても、2回だけですよ。5年間申請してようやく入所できて3年にも満たないのに、退所勧告ですか？　終の住処では無かったのですか?」と尋ねる。

それに対しては、「特養は、健康な人の生活の場ですから、終の住処にはなりません」という木で鼻を括った返答。母は医療処置は必要ないから退院できた。

頻回の入院と言っても、たったの2回なのに。近所の医療院を紹介され、見学すれば「医療院への偏見はなくなるから」と説明された。

延命を望むわけではないし、穏やかにお迎えが来るその日を迎えることを望んでいただけなのだが…。

医療院を調べてみると、月々の支払いが10万円近く増える。期限付きなら支払いは可能

かもしれないが、この先どれくらいか予想もつかないのに、安易に勧められた通りに動くのは無謀だ。
そうこうしているうちに時間が過ぎ…、母の体調も安定。

けれども…。
母の荷物は、1週間過ぎても、2週間過ぎても戻らず、かろうじて下着などはタンスに数枚、入浴時に着替えるだけ。退院3週間が過ぎたある日、3個の段ボール箱が、部屋の隅に重なっていた。その段ボール箱についての説明もまったくない状態。
介護スタッフに尋ねてもわからないが、明らかに母の荷物だった。部屋にかけていた特製大相撲関取のカレンダーはない。医療院とやらに出て行って欲しいから、その準備万端ですということなのか？　誰が片付けたのか?!　そして戻したのか。

嫌がらせにも感じた。
延命を望む訳ではなく、治療がない現在、嫌な思いをしながら施設にこだわりたくない…。そう思い、自宅に連れて帰ることを視野に区役所の窓口を尋ねてみた。窓口では、けんもほろろの対応で、「ケアマネさんはいるか？　そちらに相談せよ!　ただし、ホームヘルパーも、訪問看護師も、早々には見つからないですよ!」と。
では、「包括支援センターはどこにあるのか?」と尋ねると、「ここだ」という。つまり、この区の包括支援センターは区役所だそうだ。在宅介護支援センターがそのまま各エリアにあり、包括支援センターという名称はなく、ここが包括支援センターだという。そして、「在宅介護支援センターに聞いてみたら良い」のだということ。
思わず、対応した職員の名札をじっと見てしまった…。「ここは包括支援センターの窓口なんですよね?」と。

私と同様な高齢者を抱えている家族は、このように対応されたらどうしたら良いのか？　途方にくれてしまうことだろう…。

悲しい出来事に遭遇してしまった。
相談に来た私を席に座らせて、「どんな困り事なのか聞きますよ」という態度すらも見られない。窓口が混んでいる訳でもなく、私だけなに、ここが地域包括支援センターだそうなのに…。
あっけに取られてしまった。
少なくとも地域包括支援センターは、ここだと言うのであれば、相談受け入れ体制があっても良いのではないのか。
社会福祉に携わる人の対応ではなかった!
思い起こせば、ここ区役所に来るのも、施設の対応に様々な悲しい目にあって来た筈。だが今、こんな状況に遭遇して、がっかりだ。
少なからず私は、これまで社会福祉の現場の真っ只中で苦労してきた。
このまま黙って見過ごせない。怒りが込み上げて来た。誰にどのように伝えることがベストの方法なのだろうか。ただ、今伝えたところで単なる苦情と片付けられてしまえば意味がな

い訳で…。

お先真っ暗。我が身も介護保険を利用する年齢を目前にして、不愉快だけで済まされない社会福祉の現場を垣間見てしまった。

さて、さて、今の私に何ができるのだろう…。

日本社会事業大学創立80周年を迎えて

今年の11月9日で、日本で唯一の「GHQ立」の社大は創立80周年となるそう、です。
これを記念して、『証言・日本社会事業大学80年』という冊子が同窓会から発行されました。
この中には、五味さん（五味百合子先生）、優一つぁん（仲村優一先生）、セイリョーさん（小川政亮先生）、ワシさん（鷲谷善教先生）、キューちゃん（吉田久一先生）など、懐かしい恩師のお姿もありました。
また、道同窓会の顧問であった同窓会本体顧問の伊藤さんや、岩崎前同窓会長、大橋先生、それに、村上顧問と瀬戸会長、塚本さんの文章も掲載されていました…。
今や、清瀬世代の人の方が多くなっている同窓会員ですので、改めて、以下のように、「社大の80年」を掲載しておきます。

- 1945年　敗戦　→　GHQ進駐
- 1946年　GHQの指示、厚生省の委託により、日本社会事業学校開学
- 1948年　原宿の「海軍記念館」に校舎移転
- 1950年　日本社会事業短期大学開学
- 1951年　学校法人・日本社会事業学校設立
- 1958年　日本社会事業大学誕生
- （・　1970年　学内封鎖　→　『幻の48日』
- 1971年　社大入学（学部15期生）
- 1975年　社大卒業　→　4月1日より、社会福祉事務所保護課職員に）
- 1989年　清瀬に移転
- 1989年　大学院社会福祉学研究科修士課程設置
- 1994年　大学院社会福祉学研究科博士後期課程設置
- 2000年　日本社会事業学校社会福祉士通信教育課程設置
- 2004年　専門職大学院福祉マネジメント研究科設置
- 2016年　創立70周年
- 2026年11月　創立80周年

＊＊＊　編集後記　＊＊＊

前回、「第45号」を発行したのが、ちょうど1年前のことでした。

コロナ禍以降も様々なことがあり、今回の瀬戸会長「報告」にあるように、「どうにか、同窓会活動を正常に戻していこう」ということで、過日、関係者が集まり、それなりの方向性を見出すことができました。

ついては、道同窓会会員のみなさんには、以下の2点をとりわけお願いしたく思っています!

1.「アガペ」を継続的に発行していくために、「社会福祉随想リレー」のあなたの原稿をお寄せください。

例えば、これまで自分が社会福祉実践してきたことについての纏めであったり、現在の社会福祉状況について思うところであったりと、その内容は自由です。

また、文章自体の長さによって（「アガペ」自体は、1ページ、40字×40字）、1回切りでも結構ですし、できることであれば、複数回の連載をお願いしたいと考えています。

次号以降は、K先輩に原稿をお願いしてありますので、みなさんは、それを参考にして、精力的な原稿をお送りいただくことを祈念しています。

2．道同窓会の活動が停滞しているということはこの間、しばらく会費の請求も行っていないということであり、活動資金が乏しくなっているということですます。

そこで、過去の分は「休止」としますので、今年度2026年度の会費の納入をお願いするものです

会費は、年額2000円となっています。

振込先は、以下の通り、です。

★　ゆうちょ銀行　口座名…日本社会事業大学同窓会北海道支部
記号…19000
番号…44245181

ということで、混迷したことが続いている社会福祉の世界です。

国民の権利と暮らしを守るためにも、日本国憲法を遵守しつつ、やはり、社大の卒業生を始めとした社会福祉関係者こそが立ち上がっていくしかありません。

♪　社会の福祉　誰（た）が任ぞ
忘我の愛と　智の灯し
捧げん世紀　来たりけり
社大　社大　おお　我等